

夢か幻か、それともまさかの現実か。

これは静岡県内のガソリンスタンド「平野石油」で働く平野橙果、萌黄と、鳥取県内のガソリンスタンド「じくはら石油」で働くおたねの、不思議な不思議な不思議なある一日のおはなし。



「おいしーっ！」

若桜鉄道の隼駅のベンチで、萌黄が鳥取名物でライダーの間でも人気のマイフライに齧りつく。食パンにあんこを挟んで衣をつけた揚げパンで、長距離のツーリングで疲れた体に甘さが染み渡った。

「んーっ、カロリーは考えたら負け……！ 姉ちゃんにもお土産で買って帰ろーっ！」

萌黄は連休を作って地元静岡から鳥取県までツーリングに来ていた。ここ、若桜鉄道の隼駅は一部のライダー達にとっては聖地となっていて、大規模なイベントが開催されることもある。

今日は平日だが、それでも何人かのライダーがこの場所を訪れていた。

「ずっと来たかったんだよねえ！ はー、来てよかった！ ……あ。そうだ」

萌黄がスマートフォンを取り出し、地図を開いて検索する。

「せっかくここまで来たんだから、おたねちゃんに会いたいなー！ 連絡してみよーっ」と

萌黄が友人であるおたねにメッセージを送ると、すぐに返信の通知が来る。画面に表示された文字列を確認し、萌黄は「やったあ」と呟いた。

萌黄は立ち上がり、グツと空へと両手を伸ばして体を反らす。

「さあて！ お腹もいっぱいになったし、ここから先もよろしく頼むね、相棒！」

目の前にあるのはシルバーの愛車。萌黄はその車体をひと撫でて跨がり、颯爽と鳥取のまちなみを走り抜けた。

「あれ……ここで合ってる……よね？」

萌黄はバイクを走らせ、少し早めに待ち合わせの場所である倉吉市の白壁土蔵群へとやって来た。

白壁土蔵群は倉吉市の観光名所のひとつで、江戸時代に建てられた商家の蔵が建ち並ぶ。

本来であれば白い漆喰が塗られた壁がずらりと並んでいるはずだが、今、萌黄の目の前には、真っ黒に塗られた蔵が並んでいた。

「……白壁土蔵群？ ……どう見ても黒壁なんだけど……」

萌黄は困惑しながら観光駐車場に車をとめる。バイクから降り、ポケットから観光パンフレットを取り出して確認するが、そこにはやはり美しい白い壁の建物が並んだ写真が載っている。

「……だよ。え。……え？ どういえこと？」

萌黄は白壁土蔵群の中心部に向かって歩き始めたが、途中で出会った観光客らしき人達も困惑した表情を浮かべて建物を見ていた。

「絶対変な気がする……！」

黒い壁が立ち並ぶ一帯はどこか暗い雰囲気にも包まれており、なんとなく空気が重いような気さえしてくる。

一体何が起きているのか。

「ええーっ、なにこれ。早く来てーっ、おたねちゃん！」

「これは……どうしちやったんでしよう……」

約束の時間通りに白壁土蔵群へとやってきたおたねは、目の前の景色に呆然と立ち尽くした。おたねの頭の上には柿ちゃんもいる。

「おたねちゃんもわかんないか……。ちなみに、黒壁に塗り替えたわけじゃないよね？」

「そんなわけないです。白い漆喰の壁がとっても綺麗なまぢ並みなんです……！」

「だよ。え。」

萌黄が頷く。久しぶりの再会だが、ゆっくり挨拶をしている場合でもない。二人で少し周囲を歩いてみたが、やはりどこもかしこも白壁から黒壁に変わってしまったている。

一通り辺りの状況を確認したところで、おたねが「そういえば」と立ち止まった。

「……最近この近くに住む方達に元気がなくて……皆さん、なんとなく身体が重いか、やる気が出ないって仰っていて。たこ焼き屋のお兄さんも急に関西弁じゃなくなって、おかしいと心配してたんです」

「もしかしてこれと関係してるのかな？ 確かになんとなく重たい空気でどんよりしてる感じはあるけど……」

天気は良いはずだが、この一帯だけが妙に薄暗い。

明確に言葉にするのは難しいが「あまり良くない雰囲気」が漂っているのを、萌黄もおたねも肌で感じていた。

「とにかくっ、白壁土蔵群が黒壁土蔵群になっちゃうのは困ります！」

「観光名所だし、地域の人達にとっても大事な場所だもんね」

「はい！ なにか原因が……」

おたねの言葉がそこで不自然に途切れた。視線は萌黄の背中に向いている。

「おたねちゃん？」

「あの……萌黄ちゃん、カバンが光ってませんか？」

「え！？ 光る物なんて入ってないと思うんだけど……」

リュックは確かにぼんやりと光を帯びている。萌黄はリュックを開いて中を覗き込み、光っているモノを取り出した。

「……柿、ですか？」

「柿だね。道中で仲良くなった人たちに配ろうと思って、静岡の次郎柿を持ってきたんだけど……何で光ってるんだろ。しかも一つだけ」

「文字が浮かび上がってます……【信】でしょうか？ 萌黄ちゃん……静岡の柿って光ります？」

「光らないよーっ」

「じゃあなんで……と、二人が揃って首を傾げる。

「そもそも何で柿に文字が……？ っていうか、おたねちゃん！ おたねちゃんのカバンも光ってるよ！」

「ええっ！ わ、ホントですわね！ ちょっと待ってください。私はお土産に二十世紀梨を……」

おたねが肩に掛けていたカバンから光っている梨を取り出し、手のひらの上にのせた。

「鳥取の梨って光る？」

「光らないですね、多分。……これは【孝】でしょうか」

その梨の表面には、柿と同じようにくっきりと文字が浮かび上がっている。

二つの果物に浮かび上がった、【信】と【孝】の二つの文字。どこかで聞いたことがあるような……、と二人が思考を巡らせる。そして。

「……八犬伝……」

ピタリと二人の声が重なった。

「南総里見八犬伝だ！ 知ってる知ってる！ 静岡のお寺にさ、里見八犬伝の犬塚信乃って人の記録があるんだよ！ そのお寺に姉ちゃんと一緒に行った時に調べたんだよね。なんだっけ？ 八犬士が持つてる珠に文字が入ってるんだよね？」

「はい、そうです！ 倉吉は里見八犬伝のモデルになった里見忠義の終焉の地といわれているんです。ええと、珠は八つあって【仁】【義】【礼】【智】【忠】【信】【孝】【悌】の文字があったはずですよ」

萌黄とおたね、それぞれが柿と梨を手にとって眺める。

「ということは……、どこかに残りの六つもあるんでしょうか……？」

「柿と梨か……共通点、って考えると、静岡県と鳥取県の代表的なフルーツってどこだけ……」

「代表的なフルーツ……」

萌黄の言葉に何かを思い付いたおたねは、どこかに電話をかけた。

「おたねです！ はい、お久し振りですっ！ ……あの、すみません、お願いがあるんですが……おじさんのところに、光っていて文字がある……ええ！ ホントですかっ！？ ……はい！ はいっ！ 後で取りに行きます！ ありがとうございます！」

おたねが電話を切ったタイミングで、萌黄が声を掛ける。

「もしかして今の電話……」

「はいっ！ 仲良くしていただいでる苺農家さんです。光ってる苺を見つけて、ちょうど騒ぎになつてみたいで。苺には【智】の文字があるみたいです」

あらたな文字入りフルーツの発見に、萌黄はバツと表情を明るくする。

「やっぱり、名産のフルーツってことかな？」

「萌黄ちゃん、私、他の農家さんも当たってみます！」

「うん！ こっちも姉ちゃんに頼んで静岡の農家さんに問い合わせてもらおうよ」

萌黄の言葉におたねは頷き、早速近隣の農園へと向かう。

一方、萌黄はスマートフォンを取り出して電話をかけた。

「あ、姉ちゃん？ ……うん！ 無事無事、元気にしてるって！ あのさ、お願いがあるんだけど」

萌黄は姉の橙果に事情を説明する。

文字の残りはあと五つ。おたねと萌黄は、それぞれの地元で残りのフルーツを探し始めた。

数時間後、場所は再び黒壁土蔵群、もとい白壁土蔵群。

おたねは無事にフルーツを集め終わって戻ってきていた。萌黄と二人でこれからの予定を話し合おうとしていたところで、ダークグレーのコンパクトカーが目の前に停車する。

「萌黄、持ってきたわよ」

窓から顔を出したのは橙果だった。橙果は、かけていたサングラスを外してにこりと微笑む。

「姉ちゃん！ え、早くない！？」

「おたねちゃんと妹のピンチなもの」

「橙果ちゃん！ 遠いところを本当にありがとうございます！」

「おたねちゃん、久しぶりね。会えて嬉しいわ」

「いやいや、それにしたって早すぎでしょ、どこ通ってきたの……」

「それは秘密」

「ええ」

橙果が静岡で集めてきたフルーツを車からおろし、おたねも鳥取各地から集めてきたフルーツを並べる。

「すごい……！ ホントに揃った……！」

「わあ、どれも美味しそうです！」

萌黄とおたねは、揃って感嘆の声を漏らした。

「萌黄から連絡があった時は驚いたけれど、役に立って良かったわ。……それにしても、壮観ね」

橙果が並べられたフルーツに視線を落とす。

静岡から橙果が持ってきたのが、マスクメロン【仁】、三ヶ日みかん【礼】、幸水梨【忠】。

鳥取でおたねが見つけてきたのが、野花梅【義】、鳥取いちご【智】、倉吉すいか【悌】。

そこに、萌黄とおたねが持っていた、次郎柿【信】と二十世紀梨【孝】を加えて、里見八犬伝に登場する八種類の文字が入ったフルーツが全て揃った。

萌黄が大粒の野花梅を手取る。

「で、集めたはいいけど、これってどうしたらいいんだろうね。っていうか、収穫の時期がバラバラなのによく揃ったよねえ」

「萌黄ちゃん、それはフィクションの力ですよっ！」

「ふふふ、おたねちゃん。それは言っちゃダメよ。……原作では文字の入った珠を持った八犬士が登場するのだけど……何か足りないものがあるのかしら。探すにしても急いだほうが良さそうだけれど……」

「橙果の言う通り、周囲は既に暗くなり始めている。

白壁土蔵群一帯の重苦しいオーラとの相乗効果で、視界も悪くなってきていた。

「暗くなってくるとちょっと不気味だねえ……」

「普段は全然そんなことないんですっ！」

「里見八犬伝が関係しているということは……もしかして怨霊が関係していたり……」

「橙果の怨霊という単語に、萌黄とおたねが表情を変える。

「お、怨霊!？」

「そ、そそ、それは困りますっ！」

「ただの推測よ、八犬伝には玉梓という怨霊になった女性が出てくるから。とにかく原因がわからないと……」

「おーい! おたねちゃん!」

「橙果の言葉を遮って、一人の男性が大きく手を振りながら走ってやってきた。

「ラーメン屋の店長さん!」

「はあ……はあ……、おたねちゃんが白壁土蔵群がおかしくなった原因を調べてるって聞いてな。実は……ここだけじゃなくて羽衣池もおかしいんだ!」

「ええっ! 本当ですか!？」

「おたねちゃん、羽衣池って?」

「萌黄の問いに、おたねがポケットからガイドマップを取り出して地図を指差す。

「打吹公園にある赤い橋のかかっている池です。とっても綺麗で、そこも有名な観光スポットになっってます!」

「何か手掛かりがあるかもしれないわ。行ってみましょう!」

「羽衣池がある打吹公園までは走って数分。

「橙果の提案に萌黄とおたねが頷き、それぞれにフルーツを抱えて走り出した。

三人は息を切らしながら打吹公園の敷地内に駆け込み、目的の羽衣池へと辿り着いた。  
「これは……!」

池の水が真っ黒に染まり、周辺には白壁土蔵群と同じように重苦しい空気が漂う。  
池にかかる赤い橋も黒ずみ、元の鮮やかさはない。

想像以上に変わり果てた景色に、おたねは息をのんで立ち尽くした。

「おたねちゃん、大丈夫?」

橙果がおたねの背中にそっと触れると、おたねは両手を胸に当て、ゆっくりと呼吸をして落ち着きを取り戻す。

「……はい。……普段は、とても、とても綺麗なところなんです。春は桜が咲いて、緑の季節も、紅葉の季節も、雪が降っても……全部の季節を楽しめるところなんです……!」

「おたねちゃん……」

萌黄と橙果は初めてこの場所にやってきた。おたねは元の美しかった羽衣池を紹介したかっ  
たに違いない。

地元が大好きなのは二人も同じ。おたねの気持ちがよくわかり、キュッと胸が痛くなる。

「……絶対元に戻しますっ!」

おたねが池に近寄ろうと一歩を踏み出したその時だった。おたねの頭の上から柿ちゃんが転  
がり落ちる。

「柿ちゃん!？」

偶然落ちたわけではなかった。明らかに、柿ちゃんは自らの意思で地面に降り立った。

「か、柿ちゃんが……動いてる……?」

三人の驚きをよそに、柿ちゃんはころころと池のすぐそばまで転がってピタリと止まる。

「……柿ちゃん?」

おたねが声を掛けるとほぼ同時に、三人が抱えていたフルーツが強く光を帯び始めた。

「え! どうしたの急に!」

「まるで柿ちゃんと共鳴しているみたい」

橙果の言葉通り、文字入りフルーツ達と柿ちゃんが同調するかのように光を放っている。

「か、柿ちゃん……?」

「おたねちゃん、萌黄、柿ちゃんのそばにフルーツを集めてみましょう!」

「は、はいっ!」

三人は柿ちゃんの周りに円を描くように光るフルーツたちを並べる。

八種類のフルーツをすべて並べ終わると、柿ちゃんを含むフルーツ達がさらに強く光り輝き  
始めた。

「うわ、眩しっ!」

暗い羽衣池の周辺がその光に照らされ、異変を心配していた周囲の人々も集まってくる。

ザワザワとした雑音の中で、おたねがぼつりと声を漏らした。

「柿ちゃん……大丈夫なんでしょうか……」

おたねの不安げな様子に、橙果と萌黄が寄り添い手を握る。

眩い光の中で、柿ちゃんがゆらゆらと前後に揺れるのがわかった。前に傾き、後ろに傾き、それを数回繰り返してコロンと転がり、柿ちゃんは並べてあったマスクメロンとコツンとぶつかる。

すると、柿ちゃんとメロンが触れ合ったところがさらに強く発光した。

「吸収してる……？ 食べてるみたい……」

萌黄の言う通り、メロンは柿ちゃんに取り込まれ、あっという間に消えてしまった。すると、柿ちゃんはまたコロンと転がり、次のフルーツを取り込み始める。

円を描くように順番に。三ヶ日みかん、鳥取いちご、幸水梨、野花梅、倉吉すいか……次々とフルーツが柿ちゃんの中に消えていき、その度に柿ちゃんが放つ光が強くなっていく。

ついに残りが次郎柿と二十世紀梨だけになった時、急に柿ちゃんの動きがピタリと止まった。光が揺らぎ、転がろうとしても動けない、そんな様子に見える。

「がんばって……柿ちゃん……!!」

おたねの口から自然と言葉がこぼれる。

それに対応するように、周囲で様子を見守っていた人々からも次々と声が上がった。

「がんばれーっ!」

「もうちょっとだよ!」

「諦めないで!」

人々の声がまた人を呼び、声援は更に大きくなっていく。

「頑張れーっ! 柿ちゃんなら出来る!」

「みんな応援してるわ! お願い柿ちゃん!」

萌黄と橙果の声も加わり、その声に背中を押された柿ちゃんがついにコロリと転がって次郎柿に辿り着いた。

柿ちゃんと次郎柿が光り輝き、無事に柿ちゃんの中に取り込まれる。

残りは二十世紀梨ただ一つ。

「あとひとつ……!」

誰からともなく、その言葉が口々に囁かれる。

柿ちゃんは重たくなった体を前後に揺らし、何度も失敗しながらジリジリと最後の一つである二十世紀梨との距離を詰めていく。

「……柿ちゃん!! 全部もとに戻ったら、また一緒にいっぱいお散歩しましょうっ……!!」

おたねの声が響いた瞬間、柿ちゃんはコロリと転がり、二十世紀梨へと辿り着いた。

柿ちゃんは無事に梨を取り込むと、ゆっくりと回転しながら宙に浮かび上がる。その高さは地上から約数メートル。

周囲の人々が見上げる中、柿ちゃんは今までで一番の光を放ち、その光が池全体を包みこんだ。あまりの眩しさに三人は思わず目を閉じる。

「っ……!」

同時に渦を巻くような強い風が吹き抜け、咄嗟に両腕で顔を覆った。十数秒、いや、ほんの一瞬なのかもしれない。

淀んでいた重い空気が吹き飛び、フルーツの爽やかな甘い香りが弾けるように周囲に広がる。瞼の向こう側で少しずつ光が収束するのを感じ、それぞれがゆっくりと目を開けた。

「わ……!!」

周囲から自然と声上がる。

柿ちゃんの力の名残なのかもしれない。広がって弾けた光の粒が池を照らし出し、そこに鮮やかな赤い橋が映り込む。

幻想的な景色がそこにはあった。

「……もとに、戻りました……!!」

見慣れた打吹公園の姿。紹介したかった景色。

おたねはじわりと目の奥が熱くなるのを感じたが、すぐに我に返って柿ちゃんの元へと走り出す。

「柿ちゃん!!」

元の場所にいた柿ちゃんは、萎れてシワシワになっていた。

おたねはそっと持ち上げ手のひらで包み込む。

「柿ちゃん……!! 大丈夫ですか!?!」

「おたねちゃん、ちょっと待って」

「萌黄ちゃん……?」

萌黄が背負っていたリュックをおろして大きく開いた。そこには、まだたくさんの次郎柿が入っている。

「アタシが持ってきた柿。柿ちゃんにパワーあげられないかな?」

おたねは頷き、柿ちゃんをリュックの中の次郎柿の中央に置く。すると、柿ちゃんがほんのりと光を放ち、シワシワだった皮が元通りに艶を取り戻した。

「柿ちゃん! 良かったですっ!」

おたねは柿ちゃんを取り出して頬を寄せ、そっと自分の頭の上に置いた。

いつも通りのおたねと柿ちゃんの姿に、橙果と萌黄が同時に笑う。

「ふふ、やっぱり柿ちゃんはおたねちゃんの頭の上が似合うわね」

三人が会話を弾ませていると、おたねのスマートフォンがメッセージの着信を告げる。

それは、先ほど羽衣池の異変を知らせてくれたラーメン屋の店主からだった。

「……!! 白壁土蔵群も元に戻ったそうです!」

「よかった!」

「これで一安心ね」

「でも……まさか倉吉でこんな事が起こるなんて……」

表情を曇らせるおたねに、橙果少し考えてから、そっとおたねの手を取った。

「本当のところはわからないけれど……例えば、小さな悲しみや些細なすれ違いが集まって、大

きな力になってしまふこともある。それはきつとどんな場所でも起こるのよ。でも、この場所にゆかりのある歴史や伝説、大事に育てられたフルーツの力、それから柿ちゃんの力で、悪い力を払いのけることが出来たんじゃないかしら」

「……そう、でしょうか？」

「きつとそうだよ！ この場所だから解決できたってこと！」

橙果と萌黄の励ましに、おたねが「そうだといいです！」と笑顔を浮かべる。

三人が顔を上げると、光は少しずつ暗くなり、徐々にいつも通りの夜の景色を取り戻しつつあった。

蛍のような儂い光が下から上へ、空へと向かって消えていく。

萌黄が「ねえ、おたねちゃん」と羽衣池を見つめたまま声をかける。

「ここ、今もすごい綺麗だけじさ。昼間も素敵なところなんだろうなあ」

そのまっすぐな瞳と声音は、萌黄が心からそう思っていることを示している。

「……はい！ 自慢の場所なんですっ！」

おたねは満面の笑みでそう答えた。

翌日、関金温泉の旅館の前には平野姉妹とおたね、それから柿ちゃんの姿があった。

「はー！ほんとに良いお宿だった。お湯も最高だったし！」

「ふふ、萌黄ってば昨日から三回は温泉に入ってるものね」

「姉ちゃんだって変わんないじゃん。お料理も美味しかったし、観光もしたいし、出来たらもう一泊……」

「ダメよ萌黄、社長が待ってるんだから。おたねちゃん、とつても助かったわ。ありがとう」

昨夜、騒動が終わった後に、おたねは急いで宿に電話をかけて二人分の食事と部屋を手配した。急なお願いだっただが、おたねの顔馴染みでもある女将は快く受け入れてくれた。

「いえいえ、お世話になったのはこっちの方です！ また是非ゆっくり遊びに来て下さいね」

「うん、絶対来る！ 色々びっくりしたけど、忘れられない思い出になったよ！ な、姉ちゃん？」

「ホントね。ふふ、おたねちゃんと柿ちゃんも、よかつたら静岡にも遊びに来てね。おいしいものたくさん準備して待ってるわ」

「はいっ！ 絶対行きますっ」

「じゃあ、そろそろ出発しましょうか。私は車で」

「アタシはバイクで！」

二人の目の前にあるのは萌黄のシルバーのバイクと、橙果のダークグレーの車。二台とも、まるで今か今かと出番を待っているかのように朝の日差しを浴びてツヤツヤと輝いていた。

橙果の車には、お土産の鳥取のフルーツがたくさん積んである。

「萌黄、気を付けて帰ってくるのよ？」

「わかってるよ、姉ちゃんもね」

萌黄がバイクの鍵を取り出し、リュックを背負い直す。

「じゃあまたね！ おたねちゃん！」

「橙果ちゃん、萌黄ちゃん、本当にありがとうございました！」

響くエンジン音と共にあつという間に去っていく二人に、おたねは大きく手を振った。

「もしいつか、橙果ちゃんと萌黄ちゃんが困った時は私達が助けないといけないですねっ！」  
おたねは柿ちゃんにその声を掛け、大好きな倉吉の街を散策してから帰ることに決めた。